

田舎医者

角川小説新書

田舎医者



昭和三十九年七月三十日 初版発行
昭和四十年二月十日 四版発行

定価二百六拾円

著作者 見川 鯛山

発行者 角川 源義

印刷者 中内 あき子

東京都豊島区高田南町一ノ六四

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座 東京 一九五二〇八番
電話九段 〇一一二(代表)一五

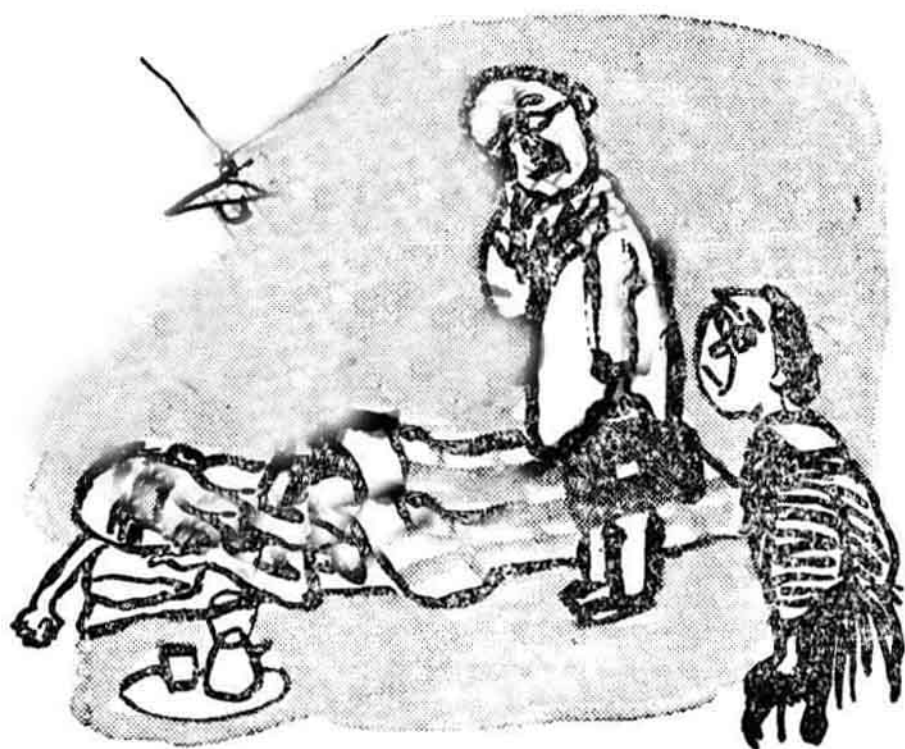
(落丁・乱丁本はお取替えいたします)

Printed in Japan

中光印刷・本間製本

田舎医者

見川鯛山



角川小説新書

目次

序

羊カン

田の畔医者

チヨ

納戸の中

たまげた薬

檻

うどん

大先生

本日休診

獅子文六

七 六 五 四 三 二 一 〇 七

鮒
 サンキチ橋
 中気のめんどり
 天皇陛下バンザイ
 猫ばば
 定さんの血圧
 祝賀会
 あんころ餅
 貴公子
 たぬき
 相 棒
 かんぷら芋
 鱒
 残 暑

一八三 一八七 一八二 一五五 一四三 一三六 一三三 一三六 一二二 一〇〇 九七 九六

自殺

ロクデナシ

さみだれ

ヒバリ

赤い三角布

テレビジョン

おできの兄弟

変態性

バナナ

種 銭

あとがき

挿絵 鷹端晩生

一八

一五

二〇

二三

二七

三三

三六

三四

三九

二四

二五

序

私が那須の山へゴルフをしに行くようになって、もう、十数年になるが、最初に行った時から、この本の著者と知り合いになった。土地のお医者さんで、ゴルフもやれば、鉄砲も打ち、スキーもやる。スキーは師範格の腕前だという。そうかと思うと、絵をかく。文章もかく。

遊ぶことが好きなのかと思ったら、慾の方も相当であって、そのうち宿屋を始めた。大きな、古い百姓家を買ってきて、その材木で、彼自身の設計で、民芸風豊かな旅館を、建築した。そして、私に、旅館の名をつけてくれと、頼んできた。腐ったマグロやエビを食わさない約束をするなら、名前をつけようといつてやった。必ず山菜と谷川の魚を食わすというから、キコリ小屋という名をつけてやった。

そのキコリ小屋ができてから、私は一年に二度くらい泊りに行くのであるが、この著者の人柄も、だんだんわかってきた。当人は、東京で医業を学び、文芸美術に興味を持って、日本のインテリのような、面がまえをしているが、私から見ると、どうも栃木県人らしい特色が強い。風采だけは、都会人のようだが、彼の体から、土の匂いがプンプンする。そこが、私には、大変、面白かった。それで、那須へ行けば、キコリ小屋に泊るのが、定石となってしまうた。

そのうちに、彼は、小説を書きたいとか、書いたとか、いい出した。私は、止せ、止せといった。小説なんてものは、医者 の道楽として、重過ぎるのである。鉄砲打ったり、スキーをやった方が、無事なの

である。しかし、彼は、鉄砲を打ち、スキーもやって、なおかつ、小説が書きたいらしい。とうとう、短篇を一つ書いて、私のところへ持ってきた。読むと、筆はなかなか達者だが、その辺の雑誌にのってるよるな、ユーモア小説に過ぎない。こんなのはダメだと、いつてやった。山の中の医者として、栃木県人として、書くことは沢山あるだろうと、いつてやった。

それぎり、彼は、小説を持って来なかった。こっちも、いいアンバイだと思っていた。

ところが、彼は執念を捨てなかった。ある農業新聞に連載したというコントの切り抜きを送ってきた。読み始めると、これが、大変、面白い。まるで、人が変わったように、観察も、文章も、彼自身のものになっている。いかにも、田舎の医者らしい、荒っぽい、短かい文章で、土の中から生れて出たような農村の人物が、イキイキと、描かれてる。それらがカモシだすユーモアが、また、非常に魅力がある。

彼も、開眼したな、と思つて、私も非常にうれしかった。

その連載コントは、果然、読者の好評を博し、NHKからも放送されることになった。彼の得意思うべしであるが、遂に、今度、一本となつて、世に出るに至った。昔の彼なら、この辺で医者をやめて、小説家になると、いい出したかも知れないが、いつか、彼も、分別のある男になった。引続き、医者と宿屋の亭主を継続して、その方で、小金でも溜めようという量見になってるらしい。

善哉、善哉。それでこそ、今後も、いい小説が書ける。

昭和三十九年春 赤坂碌々居にて

田舍医者

羊カン

農繁期になると、私の診療所はがったりとひまである。お百姓たちが一日中、水田のなかで泥だらけで働いてると言うのに、私は診察室の腰掛けに腰をかけて、足をテーブルに乗せ、開けっぱなしの窓から緑の高原を眺めたり、郭公かつこうの声を聞きながら、ただうとうとしていればいいのだ。

ときどき、看護婦のイネちゃんがあっちの部屋からお茶を持ってきてくれる。どうせ美味うまくないお茶だが私は言う。

「あい、ありがと。そこへ置いといてくれ」

「暇ですな毎日」

イネちゃんはお茶を持ってくるたびにそう言って、再びあっちの部屋へいく。彼女はそこでお裁縫をしているらしいのだ。

ふと、ちょこちょこ細かい足音がして、珍しく誰かがやってきた。窓の下を、坊主頭だけ見せて足音が玄関の方へ廻っていった。きつと近所の子供かも知れない。だが、その玄関から、太い大人の声が出た。
「先生いるか!!」

そして彼は、もう勝手にどこかと上がりこんできて私の傍の椅子へ坐った。

「フン、相変らず暇げだな。何んでそんなに、いつも睡ったげな面してんだんべなオメエは」

そのぞんざいな、無礼な男は、坊主の羊カンである。私はふだんからこの坊主に、たびたび、ここへ来るなど言っている。どっちも不景気な医者と坊主が、こそそと会ってたら、それは世間の誤解を招くからだ。

「暇だろうがなんだろうが、大きなお世話だ。そんなこと坊主にア関係ないだろう」
ムツとして私が言うのと、羊カンは私よりもっと不機嫌な顔をして言った。

「関係ねえだと？ 馬鹿言うなオメエ、オメエが暇だら俺ア方じゃもっと暇だ」

「ふーん、そりア気の毒だったナ。でもその方が好きな鮎釣りができていいじゃないか」

「鮎釣り？ ふん、魚の餌よりア俺の餌の方に困ってるぐれえだワ、この頃アな」と、いよいよ不景気な坊主である。

「で、いったい何しに来たんだ。今日は？」

「俺ア病気だ。病気だら来たってしょうがあんめえ!!」

怒ったように、羊カンが言った。

「へえ！ あんたがねえ。何んの病気だ？」

「なんの病気だと!! そんなこと俺にわかっか。なんの病気だか解れば、こんなとこさなんか誰が来るもんか、この、くそつたれ」

と、羊カンは土方よりもたちの悪い坊主なのだ。

彼はこの村の貧乏寺の住職で、そして、私とは大の仲よしである。

羊カン、坊主のくせにいつも洋服を着ている。昔は何色だったか知らないが、とにかく私がこの村にきて初めて彼に逢った時から、ずっと同じ背広だ。そして彼はワイシャツを着ない、下は糸のほぐれたメリヤスのシャツで、白足袋に下駄ばきである。

羊カンは酒が大嫌いで、甘いものが大好きだ。羊カンと言うその名は勿論渾名で、源竜とか源海とか言う本名を呼ぶ人はいない。

羊カンは五尺そこそこの小男ではあるが、とても気が強く、喧嘩をするとさっと下駄を脱いでのび上がって相手を撲る。

この坊主は、とりわけ酔っぱらいが大嫌いだった。だから、彼の喧嘩相手はたいてい酔っぱらいばかりだ。

そして羊カンの方がいつだって悪い。彼は酔っぱらいがブツブツ言っていると、それだけの理由で、柴犬のように逆毛を立てて怒り、通りすがりに下駄で撲る。だがいつも、羊カンが負かさね、瘤だらけの坊主頭が赤チンでまっ赤だ。だから村では、羊カンの評判はあまりよくないのだ。その上、彼は坊主のくせに鮒釣りが上手だった。夕方、釣竿をかついで沼から帰ると、羊カンは寺のすすけた本堂で七輪の火をパタパタあおぎ、焼きたての熱い鮒をジュンと醤油にひたしてむしゃむしゃと食う。だから彼が経を読むと、その口がいつも猫みたいに臭い。

だが、この剽軽で愉快な、そして何か不可思議な悲しさを持った男を、私はたまらなく好きだった。

もし私が死ぬときに、その枕もとに彼が怒ったような顔をしながら、ただ黙って坐っていてくれたら、

それだけで、私は決して淋しくはないだろう。

今日は、その羊カン坊主が病気だと言うのだ。

「あんたが病気だなんて、おかしいなこともあるもんだナ。どんなふうにも悪いんだネ？」

「腹が痛えんだ。そしてなにか食うとムツツリ張って、この辺がどうも具合悪いだナ」

と、和尚がうつ向いて鳩尾みぞおちを見ると、その無精髯ひげが襟にさわってバリバリいった。

「なるほどな。あんたそりゃ羊カンの食いすぎだぞ、きつと」

「いや、そうでねえだ。近頃なんざ、さっぱり不景気で羊カンも買えねえわな」

と、いつになく元気がない不景気の顔だった。そう言えばなるほど、彼岸はとっくに過ぎたし、お盆にはまだ間がある。そしてこのところ、しばらくお葬式もない。

「このごろ、オメエにしちア珍しく殺さねえもんナ。でも、たまにア配給してよこすもんだ」と、怪けしからぬ坊主が言った。

診察すると、威張ってばかりいるこの怪しからぬ坊主は、子供のように可愛らしい白い腹だった。だが、そのおへそだけは、胡麻をいっぱいためて不調和に大きく立派であった。

触診すると、その腹の中に幾つもの腫れ物はがふれた。胃と肝臓と腹膜と、そしてもう……、手術の出来ない手遅れの癌がんであった。

「どうだ、どんなあんべえだ？」

羊カンが訊いたとき、私の手は彼の腹の上で震えていた。

「ん、どうなんだ？ たんと悪いのか？」

「よ、よくは、ない」

「癌か？」

彼の手が、その腹の上で、私の手を押えつけ、そして言った。

「俺も坊主だ。本当のこと教えろ、癌だべ!!」

「いや、が癌ではない。胃潰瘍だ、だから治るさ」

やっと私が言ったが、彼のくぼんだ光ったその目が私の目を見つめていた。嘘を許さぬきびしい目であった。

「あと、どのくらい持つ、三月か？ 半年か？」

だが、私は、唯だまって彼の目を見ているだけだった。すると、ようやく羊カンがその視線をはずし、虫歯だらけの口を大きくあけて笑った。

「ハハハ、俺の葬式じゃ一文にもなんめえなァ……」

そして、二月も^{ふた}しないで、あっけなく羊カンが死んだ。

田の畔医者

うしろに大きな杉の森のある村会議長の家は、すぐそこに見えているが、ほこりっぽい村道を廻ってゆくより田の畔を通った方がずっと近い。

私は重い往診鞆をぶら下げ、平均をとりながら綱渡りのように狭い畔を歩いた。もう燕が来ている。地面すれすれに飛び交い、ときおり田へ下りて土をついばんでゆく。初夏の太陽が銀色にかがやき、水田がギラギラと光り、その照り返しが顔に熱い。そこから石灰の肥料が匂った。

「お大尺様」と、議長の家をこの部落ではそう呼んでいる。お大尺様は、選挙のたびに裏山の杉を一本ずつ切る。樹齢何百年の巨木は、悠に三百の選挙民に酒をふる舞って足りた。そしてその都度、彼は間違ひなく当選するのだった。

いつしか村会議長は、隣町に妾をかこった。村議会が終ると、役場のライトバンが土埃をたてながら、忙しくそこへ通った。だから彼の細君のヒステリーは、更年期だけがその原因ではない。

頭の上で、雲雀が鳴きだした。空を見上げたら涙が出るほど眩しく、私の片足が畔を滑って、ドボドボと深い水田に沈んだ。大いそぎで、引っこ抜くと、その泥んこの足は靴をはいていない。私はよつんばいになって泥の中を掻き廻してみたが、靴はなかった。気を静めて、盲腸手術のように泥田の中を深くさぐ